書学書道史学会 6

平成15年(2003)9月1日発行 編集・発行

事務局 〒150-0031 美術新聞社内 TEL(03)3462-5251(代) FAX(03)5489-7288(直)

書学書道史学会

古筆切における筆者伝称と書格の表示につ

政雄

7

品

視

点

に巷間でも数多く作られるようになった。 蒐集されるようになると、それらは 層に広がり、 保存したいという願望が公家衆・戦国大名や上層町衆に代表される新興 人なりの近親感から、 文化遺産が失われた。 が 室町時代、 「古筆切」のはじまりである。 応仁の大乱に象徴される戦乱によって、 古筆の巻物や帖冊子から一部を切取り、 古きよき時代であった上代への哀惜の情と、 筆跡の一行分といえども、 「手鑑」 公家や大名たちの手許にも相当量 に貼込まれ、 これらを求め、 保存しようとした 京にあった多くの 切手帖のよう 手許に 書は

所蔵者の手許に保存されるようになると、 などの別称が附されたことは、 に至った時の特徴を名称とし、 もとの所蔵者の名や書体、 共通した名称を附しておかないと、 かりに同じ古写本の一 巻から分割され、 書風、 よく知られている通りである 「本阿弥切」「高野切」 さらには料紙装飾の特徴、 分類に不都合を来たす。 この一連の古筆切には何らか 数多の古筆切になって別々の 「紙撚切」 切割される 一大色紙 そこで、

> きか、 安』といった書からも窺えるところである。 された古筆鑑定のガイドブックともいうべき いう方法を考えついたのではなかろうか。このことは、 のでない は自然な成行だが、 また、 て筆者鑑定を求められた時、 や書品の鑑定法にたよりながら、 大層苦慮したに違いない。 蒐集した古筆切を室町時代末期、手鑑などに編集、 蒐集した「古筆切」 かぎり、 通例としては筆者が署名する習慣はなかった。 和歌本などそこに書かれた内容が自ら創作したも が誰によって書かれたものか極めたくなる 鑑定にたずさわった人はどのようにすべ 当時流行していた唐物鑑賞における画 その書格に日本の能書を比定すると 『古筆名葉集』、 江戸時代に刊行 したが

方法はなかったといえよう。 類に筆者名の明らかなものは少なく、 室町時代よりはるかに遡る平安時代以前の古筆については、 しておいて、それに上位から比定していくというものであった。 いった方法で、 後期にわけ、 それを要約すれば、 さらにそれぞれについて書の格から上、 各時代の有名人、能書の人物名を書格として初めに序列 まず時代、 紙などから大まかに、 こうする以外に人物名を比定する 中 上代を前、 下に分けると 中

であったと考えられる。 方法はこれと全く異り、 式的にその真筆に近いものと考えられがちであるが、 今日、 伝某筆といえば英語における 中国における書品論に近い書格に基いた極め方 「attribute」と同義に解さ 前述の古筆の比定 九

筆者伝称の表示法について論議を深める端緒としたい れるので、 みでは古筆鑑定に当って世に誤解を与えている面が少くないと考えら かしこのことは、 度、 この問題を取上げ、 世 間 般にはよく知られておらず、 古筆研究における名称決定法と 伝某筆の表

0

会

報



随

筆写体と活字

石田 肇

でいる。学生にはかなり不評ではあるが、パソコン、インターネットをでいる。学生にはかなり不評ではあるが、パソコン、インターネットを使うのが当たり前になった現在、彼等に手書きを求める方が教育的にも意味があると思われるからである。ワープロが普及するにつれて漢字の使用頻度が増えるのは当然である。文章も長くなったといわれる。 漢字のは 頻度が増えることは漢字への関心をもたらすのだから結構なことで、漢字検定の受験者が増えることは漢字への関心をもたらすのだから結構なことで、漢字検定の受験者が増えた一因かもしれない。

ずである。 たらしく、 筆写体に近いから尊字は おり問題はない。 活字体で書いてしまうようだ。これは困った現象である。 たようである。両者に区別があることを全く知らず、難しい字になると ATOKでは当然のこと蹲と活字体である。 トには蹲などという普段つかわない字があり、学生は活字通りに書い ところで、 尊敬の尊字は子供の時に習う字であるから、筆写体で誰もが書いて 私が使用しているワープロソフトのワード、 旁を活字体で書いていた。 活字体と筆写体の区別のつかない人が以前にもまして増え 小学校の教科書は教科書体で印刷されており、これは 「尊」である。ところが昨日読んだ学生のレポ 筆写体で書くなら旁は尊でよいは 正確に言うなら 一例をあげる

某大学の書写の授業では活字体と筆写体の違いを細かくいうのだが、

師匠さんもよくは見ていないのだろう。恥ずかしいことである。おだからである。初心者の楷書作品に活字体で書いていることがある。お困った結果が出てしまう。會津八一の會は活字体であり、筆写体では曾なかなか周知しない。会津八一を正字の活字体と筆写体で書けというと

中国古典学で高名なある方はご高齢ではあるが、レジュメにしても板書にしても徹底して正字の活字体で几帳面に書かれる。活字体と筆写体の区別は当然わきまえておられるが、おそらくは文章を活字にするとき、氏の場合、普通は使わない正字が多いので、植字工(今はオペレーター)にわかりやすいように活字体で書くのであろう。この氏の姿勢は一理あることで、私も正字がワープロ第二水準にない場合は〓にして朱色で活ることで、私も正字がワープロ第二水準にない場合は〓にして朱色で活ることで、私も正字がワープロ第二水準にない場合は〓にして朱色で活ることで、私も正字がワープロ第二水準にない場合は〓にしている。ところが、氏の若い弟子連中になると、氏のやり方を真似てレジュメや板書をするのだが、正字と新字体、活字体と筆写体が入り乱れて統一がなく、彼等は活字体と筆写体の区別がついていないようなのである。

これはひとつの進歩だと思うが、さて売れるだろうか。 体のワープロ漢字ソフトの開発である。少なくとも第二水準までの漢字 なく、 は既にあるが、どの漢和辞典にも欲しいものである。 筆写体の例を示すことにするとよいと思う次第だ。このような漢和辞典 う。伏見冲敬 が筆写体であればパソコンの画面では常に筆写体を見ることになるので、 値段も安いので学生にはお勧めであるが、常用とあるように親字数が少 とは期待できまい。昨年、復刊された伏見 値段が高いので書道専攻の学生は別として、一般の学生や教員が買うこ 番大事ではあるが、 ではどうしたらよいのか。この区別を学校教育の場で教えることが一 難しい字には対応できない。そこで漢和辞典には必ず親字の下に 『角川書道字典』などを見るように学生にはいうのだが、 ひとつは漢和辞典に字典の機能を加えることであろ 『常用書体字典』(字典舎)は もうひとつは筆写



古筆復元、 原本再構築の試み

料紙や装丁などを踏まえ、臨書で培った技法を駆使しつつ、

森岡 隆

たもの。 美先生の『古筆学大成』など、古筆の網羅把握・研究が進んでいる 践したのであった。 学」を提唱したのは飯島春敬(一九○六~九六)で、昭和一四年の著 種の藤原行経筆者説なども、 治四四年創刊の それらの大半は長い伝来の途次、零本や断簡となってしまっ 別冊解説の序文でその必要を説き、本論でその方法論を実 藤原伊房・定実父子の書の確定・推定や、 書苑 あたりに始まる科学的な考究を受け、 この著に始まったもの。 連綿や散らし書き 現今では小松茂 高野切第 「古筆

さてとわらし まったっちっちゃ 老弟二 をするだのうるるとかけるの 本までのうるけられてきろ んっていいいますいの おかけんごうち 中谷正氏 高野切巻二復元(部分)

高野切巻二巻末断簡(徳川美 術館編『彩られた紙 料紙装 飾』所載)

そこで私の教室では、 使用仮名とその頻度、

が、案の定、 ンチの長巻の第一〇紙が数センチ足りず、やむなく二行にまとめたのだ いずれも三行で、巻二もその蓋然性が高いことを推知しつつ、 の一三年秋、その巻末断簡が出現。第二種では巻三・五・八の巻末歌が 氏が平成一一年春、 復元も完成し、 堤中納言集、寸松庵色紙の見開き復元、などの復元がなされてきている。 高野切でも巻一・二・九・十八・十九に加え、伝存皆無の巻十・十四の 法輪寺切巻下、 されたものや、 失部分を倣書で補う「復元」を奨励している。 流布本の刊本を底本とせざるを得ない。ただ、主要古筆での表記が注記 が、こうした復元後に原本が出現することもある。たとえば、 写本ごとに歌序や語句の異同が指摘されるのであってみれば、 新出断簡は三行。また、原本には詞書の「はるの」がなく、 本阿弥切卷十一・十二・十六、 完本の巻五・八・二十と合わせて十巻揃ったことになる。 古筆研究者校訂のものを採用することを勧めている。 針切重之の子の僧の集、 高野切巻二の復元巻を修了制作として提出した直後 伝西行筆小色紙、 関戸本古今集巻四·二十、 伝本系統の理解も必要で 名家家集切 五三〇セ 中谷正

ったように、 原色図版なき時代、 古筆の復元が原本再構築に寄与することもあろうかと思う。 田中親美(一八七五~一九七五)複製の恩恵を蒙

は橋本貴朗君が検証してくれ、札幌大会で発表することになっている。

に巻五の第四紙と第八・九紙にまたがる両紙から切り取られた重複歌が

すなわち巻五 - 二七○と二九八。江戸時代前半 その二組とも用語・用字など、

完全には

一歌を一

「世々の友」と「毫戦」に押されている。なお、これについて

度書いたところが二箇所あり、

致しないからである。

歌の初句も

「けふとのみ」という異同。とはいえ、右記「はるの」

を除

計四九字中三六字が原本と同字。つまり四分の三が原本ど

第二種の字母数が少ないとはいえ、これは非常な高率。

おりなのである。 く詞書と歌、

というのは、

第二種筆者の源兼行自身、うっかり一巻中に同

本年度の第14回書学書道史学会大会についてお知らせします。大会は、10月10日金から12日(日)までの3日間にわたり、札幌市北区の藤女子大学・北16条キャンパスほかで行います。奮ってご参加下さい。日程並びに発表者は以下の通りです。本号12ページの「連絡事項」もご覧の上、参加の申し込み等は、本号と合わせて配布の「申込ハガキ」で、9月末日までにお願いします。

.....

〈日程〉

【10月10日金】 16:00~ 第33回定例理事会 (於第1ワシントンホテル/TEL011-251-3211) 【10月11日(土)】 (於藤女子大学・北16条校舎) 9:00~ 受付 9:30~10:10 平成15年度総会 10:30~12:30 〈第1会場/研究発表〉 ①趙 麗娥「敦煌博物館蔵漢代暦譜の研究」 ②松永恵子「『飛白書』における思想的背景」 ③紅林幸子「書体の変遷Ⅱ―無・无」 10:30~12:30 〈第2会場/研究発表〉 ④橋本貴朗「『高野切古今和歌集』巻第五の2葉の断簡について」 ⑤石井 健「『三莫斎嘱書録』から見た日高秩父の書家活動 | ⑥吉野太一「『風信帖』成立年の考察 | 12:30~13:30 昼食休憩(13:15-13:30記念撮影) 13:30~14:50 〈第1会場/研究発表〉 ⑦大迫正一「鄧石如の篆書に関する考察| ⑧東 國恵「初見帛書に関する一考察―真偽の検討のために」 13:30~14:50 〈第2会場/研究発表〉 ⑨森岡 隆「寸松庵色紙の伝存点数および改竄の一端| ⑩鈴木晴彦「『観鵞百譚』考| 15:10~16:30 〈第1会場/研究発表〉 ①鶴田一雄「秦大事記研究―新出土の簡牘を中心にして」 ②横田恭三「統一秦における簡牘文字の実相―湖南・龍山里耶出土の 木牘を中心として 15:10~16:30 〈第2会場/研究発表〉 ③名児耶明「『二十巻本歌合』から伝西行筆の筆跡一群について| ④杉浦妙子「『流派』の発生と『道』の概念についての一考察」 16:40~17:20 〈第1会場/特別講演〉 田中 有「大庭脩先生の研究業績について」(仮題) 17:20 閉会の辞 17:30 閉会 18:30~ 懇親会(於サッポロビール園予定) 【10月12日(日)】 (於北海道大学文学部) 10:00~12:30 〈札幌大会記念見学行事〉

・展示① 大庭脩氏回顧「木簡学と江戸法帖研究のハザマで」(仮称)

·展示② 藤枝晃氏回顧「敦煌学の系譜」(仮称) 〈特別講師:石塚晴通教授/特別講師:大庭博子氏〉

敦煌博物館藏漢代曆譜 0

研 究

趙

で毎日の干支が記される。 な太初暦譜と言う。暦譜は各簡ごとに上端に日期があり、 左端に向かって一日一簡が並べられている。 1990年に敦煌北西の漢代燧燧遺跡清水溝(疏勒河)から出土し今、敦煌博物館に漢代の一つ暦譜が展示されている。この暦譜は 一日分が脱簡している。 この暦譜は現存二十七枚で、一日、二日、三日、 今まで出土した暦譜中ではもっとも完整的 日期の下に横書十三段 右端から

年…公元前69年が該当する。これは今まで発見された最も早いもの とが判断でき、 と亡失している一日の朔日は庚子となって、二日が辛丑、三日が壬記録簡により、この年正月の四日が癸卯であることから推算する であると言う。 あることが分かる。同烽燧遺址から紀年簡「元鳳四年七月癸未朔乙 寅となる。また縦に十三月があることよりこの年は閏月のある年で 未延年亭」出土しており、この暦譜は漢の昭帝前後のものであるこ 陳垣氏 『 二十史朔閏表』に当てはめると前漢地節元

立秋後の最初の庚を後伏と言うがその記述も残る。 また、立春、立夏、立秋、秋分、立冬、冬至の六節気が見える。よ 多いのは「建」字である。 たと考えられる。三伏は夏至後の第三庚の日を初伏。第四庚を中伏 って、春分、夏至なども脱簡した簡にかかれ計八節気が存在してい 簡の干支のしたに季節の用語がいくつか書かれている。 「建」は「十二直」の始まりを示している。 もっとも

があるか?正月未日昳、 月午日中、二月申鋪時、 六時制説などが存在して、この簡では十二時制が採用されていた。 四つの時刻は書かれていない。烽燧地にこの暦譜があり書かれた 八月寅平明時、 秦漢時代の時制については、現在、十二時制説、 いったいなんのためなのか?論説したい。 九月卯日出時、十月辰食時、十一月已隅中、十二 五月亥人定、六月子夜半、 三月酉日入時、 四月戌黄昏など時刻の記述 七月丑鷄鳴など 十八時制説、 +

《研究発表レジュメ①》

(5)

飛白 にお ける思想的背景

松永

のために図した「眞言七祖像贊並行状文」などが有名である。 精神的権威を表象する書体として広く好まれた。日本でも、 巻三)とあるように、宮殿の題額や御書碑額に使用され、 は、 一節を書いた伝空海の「飛白十如是」や曼荼羅の供養 「古人は極めて飛白を重んず。」(清の楊賓

う。 る神獣の表出は、まさしく「飛白書」と同系統をなす表現形式であ 顕著な例である。 前漢初期湖南省長沙市馬王堆一号漢墓出土の「雲気神獣図」がその と極めて似た性質を持つと思われる「雲紋」の存在が認められる 白書」が隆盛した同時期には、同様に気の流動を表現し、「飛白書」 象の一つとして、「飛白書」は存在したのではないか。さらに、「飛 の道へ導かれることが求められたのであるが、その考えに基づく形 命源とされるものである。道教の境地では、 保持したまま天界へと飛翔することを目指す神仙思想にとって、生 まさに仙界へ行き着く為の、 想」を背景とした、昇天への「運気」の表象ではないかと考えた。 に書かれているのも、 人物に、 と関係しているからではないかと考える。また、「飛白書」を書いた あると思われるが、この点については従来論じられていない。論者 一飛白書」の独特な造形の意味する所を、 なぜ、この特異の書風は広く愛好されたのか。 「飛白書」が好まれたのは、めでたい兆しを意味する「瑞祥思想 飛白書」が、 万物を構成する根源的要素であり、死を超克し、生を永遠に 「道教」に深く傾倒した者が含まれていることに注目し が在るからと思われる。 「雲気神獣図」に見られる雲気紋とその間に点在す 主に宮殿の題額や石碑の額といった限定された所 その背景に道教の中枢をなす「神仙思想」や 躍動ある気の表象であると言えるだろ 「飛白書」に表出された造形は 道教の根源である「神仙思 気の獲得を経て、昇仙 何か特別な理由

《研究発表レジュメ②》

会

《研究発表レジュメ③》

書体の変遷Ⅱ─無・无

紅林 幸子

書体上で異体関係となっていくメカニズムを解いてみたいと思う。 が書体の変遷に伴い、 に使用されてきた。主に漢代までの資料を用い、 る学派などの影響もあり、同じ「音」「義」を持つ文字「無」ととも に「亡」の部に記載されている。楷書体が整うに従い、用字法に拘 という書体から変化した字形であり、 誕生した字形である。「无」は『説文解字』に二例しかない「奇字」 ある。「無」は隷書隆盛期に甲骨文字・金文の流れを受けて篆書から とはできない。この二字は、本来全く異なる書体に出自する文字で あるいは「=」 うになると論じた。この度は、「無」と「无」の文字関係を発表する。 摂基準が変わり、字体レベルでは、異体関係として、認識されるよ ている。拙稿(注一)「書体の変遷―「氏」から「弓」へ―」におい いる多くの漢和辞典においても、「无」は標出文字であり、しかも 日本では、「无」は「ん」の字母と考えられており、現在刊行されて 同一の文字が、楷書体の誕生、活字化などの影響により、文字の包 により、「弖」に近似の字形が誕生する。つまり、書体レベルでは、 の中に見出した。篆書体の「氏」が隷書体に移行し、 は名称のみで、その実態を十分に確認できない書体が累々と残され 摂あるいは切り捨てられ、時には書体単位で淘汰されてきた。今で させてきた。しかし、同時に時代的背景も加わり、多くの文字が包 て、「氏」と「弓」との文字関係を、大陸木簡に見られる書体の違い (注二)独立した部首でありながら、「無」の「古字」「略字」「同字」 究テーマは、「文字の包摂と淘汰」である。 でその関係を示すなど、統一された見解を見出すこ 書写材料に応じてその姿を変え、書体の種類を増 字形の変化とともに包摂基準が変わり、 『説文解字』には「無」ととも 大陸で生まれた文字 本来別書体の文字 更なる草体化

[収。(二)「旡」を標出文字とし「旡」を補足する場合もある。1 (一) 『訓点語と訓点資料』第一一○輯(○三年三月三十一日発行)

高野切古今和歌集」巻第五の2葉の断簡につい

橋本

朗

7

歌が記された断簡の存在も知られている。 完本とは別に、巻第五所収の270番歌が記された断簡と298番『高野切古今和歌集』巻第五は完本として知られる。しかし、その

たつの説がある。 「高野切古今和歌集」巻第五とは別の副本の残存部とする説との、ふ切古今和歌集」巻第五から切り取られたものとする説と、現存する「高野従来、この2葉の断簡については、大別すれば、現存する「高野

五から切り取られたことを明らかにし、そのうえで「高野切古今和

本発表は、この2葉の断簡が現存する「高野切古今和歌集」

まった。 歌集」巻第五の本文の特質におよぶことを目的としたい。 歌集」巻第五の本文の特質におよぶことを目的としたい。

異なる。この点についても考察を加えたい。されたものであり、発表者の復元する原装における排列はそれとはされたものであり、発表者の復元する原装における排列に即してなたく書房・1980))。しかし、この指摘は現状の排列に即してなての特質が指摘されている(久曽神昇『仮名古筆の内容的研究』(ひての特質が指摘されている(久曽神昇『仮名古筆の内容的研究』(ひ言野切古今和歌集」巻第五の歌の排列には奏覧本系統の本文とし

《研究発表レジュメ④》

されている。

《研究発表レジュメ⑤》

(7)

三莫齌嘱書録」から見た日高秩父の書家活動

石井 健

手本』などの筆者として知られる日高秩父 が書き残した嘱書の記録である。 小學書キ方手本』、『高等小學書キ方手本』、 「三莫齋嘱書録 は、 明治~大正期に使用された国定教科書 『尋常小學 $\begin{pmatrix} 1852 - 1920 \end{pmatrix}$ 國語書キ方

所御用掛を歴任した官僚である。 奈良県、 日高秩父は、長三洲に師事して書を学び、 東京府、 宮内省と官界を歩み、 内大臣秘書官、 陸軍省をかわきりに 東宮御学問

作品等の依頼者名、 記された12冊が現存しており、それぞれに、 としての活動はほとんど紹介されていないのが現状である。 その業績が喧伝されることもなく、国定教科書手本執筆以外の書家 なく、加えて、秩父自身が門弟を置かなかったこともあり、 本や一般向け習字手本以外の日高秩父の書作品を目にする機会は少 その書は、概説書等では「顔真卿風」 日高秩父が書き記した嘱書録は、 揮毫物の種類・題名、 明治4年から大正9年にかけて と解説されるが、 数量、揮毫日が詳細に記 依頼を受けて揮毫した 教科書手

墓碑などの石碑類、 秩父と官僚書家としての日高秩父の両義性について考察を試みる。 父の書家としての活動を明らかにするものである。 チラシ)、教科書を含む手本類の揮毫についてのデータが記されてい 本発表は、 條幅、 これらの検討を通じて、国定教科書手本執筆者としての日高 「三莫齋嘱書録」を解読・分析し、多岐にわたる日高秩 屏風、 看板類、 扇子、 筆耕類 書画帖などの作品をはじめ、 (書籍の題字・扉、 「三莫齋嘱書録 証書、 顕彰碑

風信帖 成立年の考察

太一

読むか、日付順に読むかの選択があります。 を採っております。 「風信帖」の成立年を探る前提として、 私は日付順に読む方法 三通を貼り合わせ順に

ます。 付順に忽恵帖・風信帖・忽披帖を読みますと、三通の関連及び文章 の進行が見られ、各帖の解釈及び全体の解釈が行なえるようになり の関連性が認められず、 二、貼り合わせ順に風信帖・忽披帖・忽恵帖と読みますと、三 各帖単独の解釈を行うこととなります。日

です。 忽披帖では、 空海は最澄・室山・空海の三者会談を呼びかけています。 風信帖では、はじめ極めて尊敬した文が書かれ、これは最澄が桓武 であろうかと困惑し、また、最澄の主張をよくわからないと言い 天皇の御遺志を言った為で、空海はその書状をどこに置いたらよい 最澄もそのつもりで待っているようにと告げております。 に終り、十日早朝山城石川・空海の三僧が最澄を訪うことを予告し、 (第一状) 忽恵帖では、 思い悩んでいた解決策を思いついたと言っているよう このとき空海が行っている法儀が九日

交わされた書状であることがわかりました。 れます。これを弘仁元年より四年に亘ってみても該当する事態はな これを持ち帰ったことが紛議を起こし、これの解決のため両僧間に く、弘仁五年には最澄が九州巡錫のとき宇佐宮より紫衣を授かり、 『風信帖』三状には十五項目の緊張感と十二項目の特徴が見ら

れました。 弘仁五年成立説の根拠が、三帖を日付順に読むことによって理解さ 五、この事件の核心は紫衣の処置ですが、この経過及び 風信帖

語句の解釈及び文章の解釈が、 六、問題の核心及び経過がわかり、これにより従来言われて来た 新しい解釈を以て行われると考えら

《研究発表レジュメ⑥》

成。山人篆法以二李為宗。

《研究発表レジュメ⑦》

鄧 石如の篆書に関する考察

Œ

の古典となる遺品を残した。 字学的な評価はさておき、能筆家としては宋・清代と続く篆書隆盛 大きな変革をもたらした二人であると私は考えている。李陽冰の文 国書道史上、篆書だけを概観すると、李陽冰と鄧石如は篆書に

の書いた「藝舟雙楫」から学書の様子が伺える。 うにして石如は篆書の書風を確立していったのであろうか。包世臣 品を年代順に追っていくとかなり書風の変化を看守できる。どのよ その清代篆書隆盛の先駆けの一人が鄧石如である。石如の篆書遺 及秦漢瓦当碑額。以縦其勢。博其趣。毎日昧爽起。研墨盈盤。至又苦篆体不備。手写説文解字二十本。半年而畢。復旁搜三代鍾鼎。 迺好石鼓文李斯曄山碑大山刻石。漢開母石闕燉煌太守碑。 及皇象天發神讖碑。 李陽氷城隍廟碑三墳記。毎種臨模各百本 蘇建国

の先人の遺品をどのように継承し、さらに発展させようとしたので した上で、具体的に三点挙げて指摘されている。石如は李陽冰や他 る。どういった点が陽冰に及ばないと考えていたのであろうか。 力には驚かされる。篆書に五年、隷書に三年の計八年を習得に要し ベースにしたとある。更にそれらの遺品の習得に費やした時間と努 の貴重な篆書遺品に接する機会を得、 ている。その上で自ら「吾篆未及陽冰。而分不減梁鵠。」と言ってい 一方、鄧以蟄によると鄧石如の創作活動には独自の原則があると このように石如二十七、八歳の時、 石如の篆書は李斯と李陽冰を 梁巘との出会いにより、

:の技法や表現法を探りたいと考えている。 い鄧石如であるが、今回は作品化の先駆的存在である篆書にポイ あらゆる書体に通じた書家として非常に人気もあり、 改めて具体的かつ詳細に比較対照を重ね、 そこから制 先行 研究の

> 初見帛 書における 考察 真偽の検討のために

東 或 恵

要もあり、専門外ながら敢えて取り組むことにした。 あった。その時に受けた大きなショックが今も忘れられない。しか し真偽が定かでないことや高価なため、 収集資料の中に一枚の古色蒼然とした紛れもない初見の帛書が 年から徳島文学書道館の資料収集のお手伝いをしている 館の収集の枠外で検討の必

用していたが、この帛書に描かれている絵と書かれた文字内容が何 紙の発明以前は竹と帛が万般の所用としていた。したがって竹帛は その間の下部には、木に登っている人や狩猟と思える絵などがあり のため、またどのような意図で書かれたものなのか。 古く戦国時代の前後に、記録・文書・尺牘等広い範囲にわたって使 竹帛に書す」といい、「名を竹帛に垂る」と「後漢書」鄭禹伝にある。 著し、万世に施し永々窮り無し」とある註に「古代に紙なし、 れた時代と内容について、その真偽の検討のために考察を試みた。 実にユニークに思えた。そこで今回の帛書の絵・書体等から、 行とその下部に刀と槍を持った7人が描かれている。続いて8行と 部と文字が2行で、2行目は中程で終わり、1行空いて、 は35字、少ない行は10字しか書かれていなかった。右の端は絵の一 色だった。そこに35行の文字が書かれていた。1行の字数が多い 1、帛書についての文献は、「史記」孝文本紀に「祖宗の功徳竹帛に 右上に弓を持った絵等が描かれていた。さらに10行と5行があり、 その帛は縦が約20四横が約40四程、ねずみに少し黄土色がか 続いて10 0

《研究発表レジュメ⑧》

をいただき、

体・書風・筆勢・筆致等からも検討の必要があると考え、 恐らく戦国・楚国の帛書と考えられるが、その真偽については

報告の場

ご指導を仰ぐ次第である。

は

殆どが波磔があるのに、

2、漢の帛書(黄帝書・老子甲本・老子乙本・周易・戦国縦横家等

今回の帛書は東周

(春秋末)

仰天湖や包 の侯馬盟書

で

や温県盟書や長沙の戦国・楚国の帛書と相通じる一方、

や信陽出土の楚簡等の書体や書風とも通じるところもあるの

の六点。

 $\begin{array}{cccc} @ & @ 5 \\ 2 & 2 \\ 7 & 1 \\ 7 & 3 \\ \end{array}$

会

《研究発表レジュメ⑨》

寸松庵色紙の伝存点数および改竄の一

端

森岡 隆

「古今和歌集」の歌序と初句等で記せば、「古今和歌集」の歌序と初句等で記せば、「古今和歌集」の歌序と初句等で記せば、「古今和歌集」の歌序と初句等で記せば、

②210 「はるがすみ」 『

『日本名跡叢刊49』等所載『紀貫之朝臣真蹟帖』所収

④212 「秋かぜに」

久曽神昇『仮名古筆の内容的研『家奈能千種』所収

「こ、ろあてに」 賀茂季鷹 (一七五一~一八四一) 臨写「うきことを」 一 冷泉為恭 (一八二三~六四) 臨摸所載 (秋かぜに) 久曽神昇『仮名古筆の内容的研究』

写本と認め、これら四点を寸松庵色紙考究の資として扱いたい。 また、うっすらと残る左文字で原姿が窺える27「あさみどり」と256「あきかぜの」の二点、擦り消ち痕から「ひともと、おもひ256「あきかぜの」の二点、擦り消ち痕から「ひともと、おもひしはなを」の初二句が窺える275とともに、前記⑥を同色紙の転しはなを」の初二句を表示として認めるもの。 本論ではこのうちの②・④の二点を、後世の改竄を指摘しつつも本論ではこのうちの②・④の二点を、後世の改竄を指摘しつつも

ついても述べたい。と同時に、現時点で①・③・⑤を同色紙として認めかねる根拠に

することとする。が割愛されたものについて、書式との関わりから、その理由を解明の」・215「おく山に」・287「あきはきぬ」など、本紙周りの方、後世における改竄のうち、④のほか105「うぐひす

13の四点が集中するのは、何とも不思議なことである。 それにしても、寸松庵色紙認定のボーダーラインに、210~9

『観鵞百譚』考

鈴木

晴彦

法の伝授は、近世書道史を考察する上で重要な意味をもつ。

「一六五八~一七三五)である。この雪山から広沢への唐様書いる。その雪山から唐様の書法を直伝されたのが、江戸の門人細井いる。その雪山から唐様の書法を直伝されたのが、江戸の門人細井いる。その雪山から唐様の書法を直伝されたのが、江戸の門人細井いる。

晩年であったといえる。 晩年であったといえる。 晩年であったといえる。 に沢は遠州掛川藩士玄佐の子として生まれた。十一歳の時に江戸 として柳沢吉保(一六五八~一七一四)や徳川光圀(一六二八~一 として柳沢吉保(一六五八~一七一四)や徳川光圀(一六二八~一 として門戸を張ったのは、よわい五十を過ぎてからのことで、かなり のまにも仕えている。こうした経歴をもつ人物が、書家と して門戸を張ったのは、よわい五十を過ぎてからのことで、かなり

しかし、書家への大転換後、その書活動は和様書道全盛の書道界の中で特異な存在として光彩を放つことになる。つまり、それまでの秘伝・口伝の書の世界にあって、書の歴史を踏まえて実践的な理論の展開を推し進めようとしたからである。殊に広沢の精力的な著論の展開を推し進めようとしたからである。殊に広沢の精力的な著論書を隆盛させる原動力となった。その意味で、近世書道全盛の書道界る広沢の著述の功績はたいへん大きなものといえる。

とによって広沢の唐様書の考えをいささか導き出してみたい。鵞百譚』(享保二年・一七三五年刊)をとりあげ、それを精査するこそこで、本発表では広沢の書にかかわる代表的な著述である『観

《研究発表レジュメ⑪

会

《研究発表レジュメ⑪》

秦大事記研究 新出土の簡牘を中心にして一

鶴田 雄

限定されると一般に言われてきた。 また、思想を統一するために、「焚書坑儒」を行なったとされる。そ 築いた。始皇帝は治世に当たり、 秦の始皇帝は、 秦代に関する歴史的な記述は、 紀元前二二一年に天下を統一し、 郡県制を設き、 『史記』 P 度量衡を統一した。 『戦国策』などに 中央集権国家を

二年までの記事で、資料的にも重要である。 七月に湖南省龍山県里耶で三六、〇〇〇枚の簡牘が発見された。これ しかし、近年秦代の簡牘が発見され、 その量も多いが、 記述の内容が始皇帝の治世二五年から二 注目されている。特に昨年 一世の

策』には記載されていないものも含まれている 戦国縦横家書」と称するものがあり、その内容は 一九七三年に湖南省長沙市で発見された馬王堆帛書には 『史記』 p 『戦国

出ると、報告書には必ず べられている。本研究は、それを実際に試みようとするものである。 によって新たに塗りかえられようとしている。 い。これまで、文献でのみ語られてきた秦の歴史が、新出土の資料 そこで、新出土の資料を中心にして秦代の歴史を再構成してみた 「史書の欠落を埋めることができる」と述 従来、 新出の資料が

統 秦における簡牘文字の実相

湖南・龍山里耶出土の木牘を中心として

横田

恭三

られる。文末には「○手」という署名と思われる書き込みがある。 二種は専著が刊行され、龍山里耶1号井に関しては『文物』 系風の文字を想起させる円転様式も見られる。 文書の実物という点である。公文書として書写する内容はもちろん 片·木牘一方)、 によって天下統 書風に大きな違いがある。

また、秦隷特有の方折体のみならず、 によって書風にも差が見られるだけでなく、 のこと、そこに書かれた文字の姿にもそれなりの制約があると考え 牘三一方)でしかない。 りにものぼるというが、今回の図版掲載は表裏合わせて六二点 にいち早く簡報が出された。里耶出土の簡牘は総数三六、○○○枚余 がいくつか連続して出土している。 雲夢龍崗6号墓(竹簡二九三残 枚の木牘中に複数の「○手」が書かれているものもある。書き手 前二七八年、秦は楚の郢を陥落させた。その五○余年後、 関沮周家台30号秦墓(竹簡三八一枚・木牘一方) 一が果たされた。近年、統 しかし、重要なことは、 一後における秦代の簡牘 木牘の表面と裏面には 初めて見る秦の公 始皇帝 03 0

ら統一秦へと移る中で木牘に書写される秦隷の実相はどのようであ たのか、その一斑を里耶木牘によって探ってみる 本発表では、龍崗・周家台の木牘をも視野に入れつつ、 戦国秦か

《研究発表レジュメ⑩》

群から、

判明したことをふまえて紹介したいと思う。

《研究発表レジュメ⑬》

一十卷本歌合」 から伝西行筆の 筆跡 群につい

明

7

代を経たはずの二つのグループ中に、全体の構成や、書き方などの行筆と極められる歌集の写本の一群と似た雰囲気のものがある。時 印象が共通するものもあるという事実から、「二十巻本歌合」の一群 身が、形式を統一して、歌合ごとに順次書写したものと思われる。 巻本歌合」の現存筆致からは、 ことは、 期の限定できる数少ない遺品として知られる。時代と共に流出し おそらく、編纂者達とともに書写グループが、 忠筆と伝称される。ただし必ずしも筆跡で分類されていない。「二十 が、断簡は、 ものも多く、 時期に書写されたものとほぼ確定しており、書道史上でも、 かって一応の完成をみたと考えられている。しかし、 紀前半に藤原忠通の周辺で集成されたもので、 本類従歌合」(略して「二十巻本歌合」)の草稿本の一群は、 いくつかの歌合の一巻が、歌合毎に書風が異なっているものもある 諸家にも伝存するが、さらにそれらから切り離され、 主催者別・年代別に整理し、二〇〇種をとりあげ編纂した「二十巻 世紀の書風の変遷を明らかにする上で、 ところでそれらの中に、西行筆と極められる巻物があり、後の西 貴族が文芸の楽しみとして催す、歌を詠み合い優劣を競う歌合 ろう。これらについて、 周知の通りである。それらの伝称筆者は、巻子本は様々だ 伝西行筆と伝わる多くの作品との関連を探ることは、 忠通の家に遺り、 「柏木切」あるいは「二条切」として世に伝わっている 「柏木切」が藤原忠家、「二条切」が忠家の子の藤原俊 伝来したいきさつなどから、伝存品は、この 最近の冷泉家伝来の写本と伝西 永く近衛家に伝えられたものである およそ二〇人位の筆者が考えられ 今まで以上に重要となる あるいは編纂者達自 約二~三〇年ほどか 浄書本の完成 断簡となった 1行筆の

流 派 の発生と 道 0 概念についての 考察

杉 浦 子.

的観念と結び付いた意味内容を念頭に置いているといってよい しも明確な概念規定があるわけではないが、一定の精神的かつ道徳 私達が通常、「書の道」という言い方をする場合の「 道 は、 であ

という概念はなかなか理解されにくい言葉で、それは日本独自のも めない。つまり、欧米においては、私達が共通理解としてもつ「道 言葉が近いらしいが、「WAY」では精神性や道徳性が希薄な感も否 歴史は大変に長い。しかし一方、この概念はアルファベット文化圏 のといえるようである。 では通用しないもののようで、 た、『夜鶴庭訓抄』では冒頭部分にみられるなど、日本におけるその 道」という概念は、摂関時代の『源氏物語』などにも使われ、 例えば英訳すると「WAY」という

基盤を失った貴族の、 らかではないが、「世尊寺家」という家名を初めて用いた世尊寺行能 るようでもある。 分かつ事で己の存在を際立たせようとする意図も見え隠れし、 あたりから使われだした言葉のようである。 ていったのが「流派」という考え方であろう。 その「道」の概念をより鮮明に打ち出し、 文芸に頼って生きようとする姿勢が見て取 そこには、他と門流を 明確な形として形成し 「流派」のルーツは詳

で続いてきたといえるであろう。 の文芸一般と同様に書においても、 を遵守すること自体が目的化していくといった状況にまで至る。 をするという事態へと進んでしまう。秘事・口伝が尊重され、それ その結果として自我の抑制が生まれ、感動を鈍化してまで型の鍛錬 書のみならず文芸一般はやがて、「流派」という型の踏襲へと進み この宿命的な問題状況が近代ま

有の精神性・道徳性の 本稿では、この 「書の道」という概念を綿々と受け継いできた私達日本人の 「流派」と不可分の関係にある 面を考察する。 道 0) 概念構造

《研究発表レジュメ⑭》

した。

学会だより

第32回臨時理事会ひらく

開かれました。 会議では、国際大会があった二〇〇 八月二日、第三十二回臨時理事会が

○年以来、三年ぶりの大量承認となる

新規程下での実施をめざす。 直し、改定を急ぎ、来春の役員改選は 討を重ねている選挙管理関係規程の見 監事、萱原、柴田委員)を設置して検①長年の懸案で、小委員会(座長浦野 定・承認事項は次の通りです。 件が審議決定されました。 認されたのをはじめ、十四年度決算案、 二一名もの新入会員(別項参照)が承 十五年度予算案など、運営上の重要案 主な決

③学会役員と会員有志を斯学分野の講 の作業を急ぎ、今秋の完成をめざす。 ②完成が遅れている『書道史年表事典 演ニーズのある集会等に派遣する窓口

会

〇 12 日

<u>日</u>

0

「札幌大会記念見学

【第14回札幌大会各種連絡事項

長い活動とすることとし、運用マニュ題は「年度更新」(重任可)して息の のガイドラインを決定。 原則的に強制手続きをとること」など を懸念し、「会費の三年滞納をもって ④長期にわたる会費滞納者の存在が会 開始するとともに、今後も講師陣と演 の活力と健全な財政運営を妨げること アルを決定。

会承認を経て正式に入会が決定されま す。次の理事会は、大会前日の十月十 日に予定されています。 なお、新規入会希望者は、必ず理事

◆会員動静

○趙守鎬会員=韓国芸術院会員推挙 ○高木厚人会員=日展新審査員就任 ○外田久美会員=茨城大学助教授新任 (名簿訂正) ○真神仁宏会員=日展新審査員就任

○赤平和順)橋本貴朗 (大正大学助教授→教授) (大東文化大学研究生→県

○大会参加費 協力を得て、 庭脩名誉会員夫人大庭博子様のご 厚意、さらには昨年急逝された大 同大大学院教授石塚晴通先生のご 北海道大学文学部構内において、 院生会員および会員同伴の学生 (同伴者含) 三、〇〇〇円、 は、 同じく札幌市内にある (資料代込) 実現の運びとなりま は、 学生・ 会員

昼食弁当代は一、○○○円、懇親院生は二、○○○円です。10日の 1 別の振替用紙を使って下さ ご送金下さい。大会関係のご送金 大会参加費、懇親会費、 大会当日の緊急連絡先は、 年会費の納入は、大会関係用とは は10月6日必着とします。なお、 みのうえ、大会専用の振替用紙で 会会費は五、〇〇〇円です。 とします 「参加申込ハガキ」で申し込 090-3084-856 弁当代等 事務局

立和光高校講師

となる「講演センター」の本格運用を

新入会員紹介(平成15:4~

〇亀石二三 (文苑) S29生 〇田村実(昇鶴)S7生 ○辻尚子(紅雲)S39生 四国大学講師 ○川上貴子 ○北村重雄 S43生 九州大学院生 (霞山) S7生 (玄松) S14生 四国大学

教授 (遙山) S 8 生 四国大

S 27 生 安田女子大学助

○松丸有希子

S 55 生

大東文化大学

○亀田絵里香

(有鵬) S51生

大東文

化大学院生

)趙麗娥 学院生

1968生

○本川万希子

S 54 生

北海道教育大

○竹内篤志

S 53 生

とわの森三愛高

校講師

○宮脇玄徳

S 52 生 S 28 生

札幌龍谷学園高 筑波大学院生

校講師

○荒井雄三

○魚住和晃(卿山) ○川畑薫 S48生)S21生 神戸大学院生

○信廣友江 ○富田富貴雄 学教授

教授 神戸大学

○宮木繭子

(光帛)

S 54 生

大東文化

大学院生

編 集 後 記

いて、自分が余りに無知であることを時代・技術・用具など基礎的な事につ だが。その当時のことが脳裏に浮か ただく機会があった。今はガラス越し き、古筆切の名品等をじかに見せてい 先生宅での研究会に参加させていただ 集書画展」が開催された。生前、植村根津美術館で、「受贈記念植村和堂収 昨今です。 低下してしまい、内心忸怩たる思いの ようになってから、めっきり出席率が ◆平日の夕刻に幹事の会合が持たれる 思い知りました。 (富田 (小川博章) 淳

15

○津坂貢政

S 53 生

広島大学

院研究生

○青山由起子 (緑珠)

S 27 生

神戸大

文学博士

四国大学教授

○富久和代 (鳴泉) S19生 四国大学

度に参観できる好企画でした。採拓の 料から採拓された拓本を十数種類も一

通褒斜道刻石拓本」展は、

同じ石刻資

◆吉田苞竹記念会館で開催された「開

うか。とにもかくにも、多数の参加を 催となっている。はたしてこれが、参 さらに例年より一か月余り繰り上げ開 今回は北の大地北海道が会場であり、 漏なくお知らせすることにある。だが、 帰宅中、百段ほどの石段を八合目まで 加動向にどのように影響するのであろ た大会での発表内容を、会員各位へ遺 スのような花が夕闇の中に浮かんでい 登って一息入れると、烏瓜の白いレー ◆西の青空に美しい三日月を見ながら や汗をかきませんように。(森岡隆) をかきましたが、出来上がった後、 や学会誌の編集日程も早まり、少し汗 ◆本号刊行の使命は、十月初旬に迫っ て、ゆっくり休みました。(柿木原くみ) ることから、その案内を掲載する会報 ◆大会が例年より一か月早く開催され